

# 近代中国の写真文化と山本讚七郎

遊 佐 徹

## 1、はじめに

一般に、1839年に「正式」に誕生したとされる写真技術は、たちまちのうちに世界へ広まり、当時の人々に新しい経験、感覚、美意識をもたらすこととなった。王朝体制下にあった中国（清朝）もまたその例外ではない。その経緯と実際に関しては、すでに通史、個別論文の形でいくつもの研究が発表されてきており、それらによって技術文化史的にも、社会文化史的にも中国における早期の写真文化の受容と広まりの具体的様相はかなり明らかになったといえる。

こうした研究を踏まえつつそこに展示思想を読み取ろうとする、すなわち、中国の写真文化に織り込まれている思想性に分け入ろうとする時必要となってくる観点のひとつに、写真が必然的に形づくる「見る」—「見られる」、「見せる」—「見出す」という関係に潜む政治や権力のテーマの追求があるであろう。

かつて筆者は、その追及を王朝体制末期の中国の事実上の支配者であり、また、近代中国写真史において極めて興味深いエピソードを残した人物である西太后に着目して試みたことがあった<sup>2</sup>。西太后こそは、新来の写真技術に触れることになった近代中国人のなかで、単なる複製技術としてではなくそれが担い得る近代政治文化上の役割——近代国民国家体制の形成過程において新たに「身体」が発揮することを期待された政治性の表象技術——を初めて自覚的に理解し、利用した（しかし、またそれは複製技術であったため、たちまちのうちに西太后のコントロールの効かぬ存在とも化すこととなったという事実もある）人物であったのである。こうした点において、西太后と写真の関係は、明治新政権下における天皇と肖像写真（やがて「御真影」へと変化する）の関係と重なり合うものとして捉えることができるのであるが、実は、写真文化史上における西太后と日本の関係は、そうした比較文化史的レヴェルで確認できる以上に緊密な関係を持つものであったのである。それは、日本人の写真師が西太后の肖像写真＝公式ポートレートを撮ったという事実である。その日本人とは、清朝末期の北京王府井で写真館を開業していた山本讚七郎といい、現在の岡山県井原市芳井町の出身である。

かつて実施した筆者の研究では、そのテーマの都合上、西太后の肖像写真（およびそれに先立って制作された西洋人女流画家の手になる肖像画）自体の分析に力点を置いたため、山本讚七郎に関しては十分に考察し論述する余裕を持たなかった。加えて、その後、関連する新しい資料を様々な形で見付け出すことができたこともあり、改めて山本讚七郎をメインとして近代中国写真史の重要な一側面を描出し得る可能性を認識するに至った。本報告では、その前段階の

作業として、新たに発掘した山本に関する資料、エピソードを整理し、彼の存在を核とすることで見えてくる近代中国写真史の一端を示してみたいと思う。

1. それらのうち代表的なものを以下に挙げる。

○専 著

馬運増、陳申、胡志川、錢章表、彭永祥編著『中国摄影史 1840—1937』（中国摄影出版社 1987年 北京）。

上海摄影家協会、上海大学文学院編『上海摄影史』（上海人民美術出版社 1992年 上海）。

宿志剛、林黎、劉寧、周静編著『中国摄影史略』（中国文联出版社 2009年 北京）。

陳申、徐希景『中国摄影芸術史』（生活・読書・新知三聯書店 2011年 北京）。

葛濤、石冬旭『具像的歴史——照相与清末民初上海社会生活』（上海辞書出版社 2011年 上海）。

○論 文

王煒「清末北京摄影活動探究」（『北京学研究文集（2005）』[同心出版社 2006年 北京]）。

王煒「清末北京摄影活動探究」（北京市哲学社会科学研究基地報告・2006『北京学研究報告』[同心出版社 2006年 北京]）。

陳申「北京早期照相館史料概況」（北京市文史研究館編『京都憶往』[北京出版社 2006年 北京]）。

王天平、蔡繼福「上海最早照相業新証」（『上海大学学报（社会科学版）』第11卷第6期）

2. 遊佐徹「蠟人形・銅像・肖像画——中国近代における身体と政治の関係についての覚書（5）」（『岡山大学文学部紀要』第52号 2009年）、『蠟人形・銅像・肖像画——近代中国人の身体と政治』（白帝社 2011年 東京）。

## 2、伝記、事跡資料

山本讚七郎の生涯と業績を知ろうとする時、最も参考になるのは、現在に至るまで山本を扱った唯一の専論である日向康三郎氏の以下のような一連の研究報告である。

・「林董伯爵と写真師山本讚七郎——ルーツ調べの余録としての古い写真の発掘——」（『史談いばら』24号 1997年）

・「山本讚七郎をめぐる——続・林董伯爵と写真師山本讚七郎——」（『史談いばら』25号 1998年）

・「山本讚七郎〔Ⅲ〕——明治の写真師の文書資料」（『史談いばら』29号 2005年）

日向氏は、蘭方医にして一橋家の御典医でもあった岡山県井原市芳井町出身の山本梅園という人物に関する調査をおこなったことを機縁として、梅園の甥にあたる讃七郎にも関心を持たれることになったのである。

日向氏が、研究の過程で参照・発掘・言及された山本の伝記、事跡に関する資料は相当な数にのぼり、基本的なものは網羅されている。このセクションでは、それらにいくつかの資料を補足してみたい。

#### ◎日本写真史において記録された山本讃七郎

当然のことであるが、明治の写真師、山本讃七郎はまず日本写真史のなかで語られるべき人物である。日向氏もそうしたコンセプトの資料として、人名録の形式の横田洋一監修『写真集「明治の横浜・東京」—残されていたガラス乾板から—』所収【幕末・明治の写真師小辞典】(神奈川新聞社/かなしん出版 1989 横浜)の記述と昭和十年に催された明治前期、東京で活躍していた往年の写真師達による座談会の記録である松本碧『写真の今昔』(日本写真興行通信社 1935 年)を利用しているが、その他にも同類の資料の存在を指摘することができる。以下それを挙げてみよう。

○島岡宗次郎編『月乃鏡—全国写真師列伝—』(筑紫紙魚の会復刻 1998 年 別府。本書は 1916 年大阪の大手写真材料商桑田商会主人、桑田正三郎が自らの還暦と商会の大阪開店 30 周年を記念して出版したものである)

##### ・中島精一の項——中島精一の弟子のひとりとして記載

先生夫妻の弟子を見ること猶子のごとく寛容以て之れを訓育し懇切以て之れを指導す、是を以て其門に教へを受くるもの前後五百九十一人に及び独立業を開いて声明あるもの宮内幸太郎、秋尾新六、佐藤福待、岡靖一、岡田君太郎、成瀬啓次郎、山岸彦次郎、橋本良知(以上東京)小泉道太郎(京都)田中幸次郎、阪根勝一(以上羽前)中坪政衛(長野)中島岩次郎(千葉)山本讃七郎(北京)の諸氏あり。今門弟諸氏相図りて恩師会を組織し毎年夫妻を請じて謝宴を開くを例とす、盛んなる哉。

##### ・中山張次郎の項——中山張次郎の師として記載

安政五年豊後国大分藩士の家に生る。先生幼にして和漢の学を修め、壮時東京に出て、芝区日影町写真師山本讃七郎氏に師事す、居ること三年具さに練磨の功を積みて其技堂奥に入る、……。

○梅本貞雄、小林秀二郎編『日本写真界の物故功労者顕彰録』(日本写真協会 1952 年)

##### ・山本讃七郎の項

安政二年七月生、岡山県後月郡梶口村の人。明治十年頃林董の書生となり写真術を学ぶ。後中島待乳の門下に入り、明治十五年芝日蔭町に開業、其後鹿島清兵衛の玄鹿館の主任技師。後北京に渡り開業。北清事変に万難を排して撮影し勇名を謳わる。甥山本素外に業を譲つて帰京し、幻灯会の開催、後進

の指導等に当った。

また、山本讃七郎は近年、近代日本の視覚メディア、写真ジャーナリズム研究でも取り上げられた。

○井上裕子『日清・日露戦争と写真報道 戦場を駆ける写真師たち』（吉川弘文館 歴史文化ライブラリー348 2012年 東京）戦間期の情勢と義和団事件の報道、海を渡った写真師たち、北京の写真師—山本讃七郎

山本は、外交官林董の書生をしていたが、林の勧めもあって、写真師の道を選ぶ。中島待乳について写真術を学んだ後、明治十五年（一八八二）に東京で写真館を開業する。みずからの写真館と兼業だったのかどうかはわからないが、その後、鹿島清兵衛・清三郎兄弟の玄鹿館の写真技師となる。玄鹿館を辞して北京に渡るのが、明治三〇年五月頃であったという。山本の渡清についても、林の勧めと世話があっただろう。林は、明治二十八年五月から翌二十九年十一月まで、駐清公使を務めている。北京に渡った山本は、清朝宮廷に出入りし、西太后などを撮影したという。その他に、北京城内や郊外の風景・建築・石窟・石仏などの写真も残している。

山本が北京に開業して三年後の明治三十三年、義和団事件が起こる。……日本人を含め北京にいた外国人たちは、籠城戦を戦うことになったが、山本もまたその一員となった。籠城戦から解放された後、籠城戦を戦った人々や戦闘後の状況を写した写真を、博文館の雑誌『太陽』や『東洋戦争実記』に寄せている。

義和団事件後、いったん帰国した山本は、再び清国へ戻り写真館を営む。その後、明治四十四年頃に写真館を長男に譲って帰国し、昭和一八年（一九四三）に亡くなる。

#### ◎義和団事件と山本讃七郎

先に引いた『日本写真界の物故功労者顕彰録』の文面中に「北清事変に万難を排して撮影し勇名を謳む」とあるように、写真師、山本讃七郎の名を一躍高からしめたのは、彼が渡清後程なく遭遇することになった義和団事件であった。列強諸国への清朝の宣戦布告によって日本公使館での籠城を余儀なくされた邦人のなかに彼も含まれていたのである。

それゆえ、山本の名は義和団事件関連資料のなかにしばしば顔を出すことになる。日向氏も柴五郎・服部宇之吉『北京籠城日記』、小川量平『北京籠城日記』、水田南陽『北京籠城』を引いているし、また、氏が指摘するように、この他にも北京籠城戦を記録した資料に山本の名を見出せる可能性は高いだろう。本セクションでは、そうした資料の一部であり、しかもそれらのなかにあつて極めて臨場感に富むものを挙げることにしよう。それは、義和団事件を伝える当時の新聞記事である。

朝日新聞の記事には、事件直後より山本の名がしばしば登場している。最も

早いのは1900年8月31日の「北京籠城義勇兵」で戦死者8名を含む61名のなかにその名が見える（ちなみに籠城から解放されたのは8月14日）。また、その帰国も9月7日の「籠城夫人来る」で報じられている。とりわけ興味深いのは、帰国後間もなく開始された4回に渡る「北京写真師山本讚七郎氏籠城談」（9月14日～9月17日）で、籠城戦の生々しい記憶が記されている。その連載開始に当たり、朝日新聞は次のような説明を施している3。

○「北京写真師山本讚七郎氏籠城談（一）」（1900年9月14日号5面）

北京籠城者の一人として、専ら衛生炊事の両務に奔走し、能く義勇兵の任を尽して九死に一生を得、一昨十二日西公使夫人の一行に加はりて無事帰朝したる山本讚七郎は、写真術を以て夙に其名を知られ、去三十年中、妻子を芝区新桜田町の家に残して、助手渡辺友吉、松本幸八両氏を随えへて渡清し、北京城内東安門外霞公府の路南に照相師、即ち写真師の業を開き居たるが、端なく団匪の事起りて、籠城の難に逢へり。氏は年齢四十余歳と覚しく、一見着実の人たるを知る。今こゝに氏が専ら奔走したる衛生炊事の両務について聞き得たる談話を記すべし。（句読点は遊佐。以下、明治期の日本語資料、清朝期の中国語資料に関しても同じ。また、前者に散見する変体仮名は通行の字体に改めた。）

本連載の内容は、掛け値なしの籠城時に彼が果たした「衛生炊事の両務」であったが、やがて、山本の名は、本業との関連においても報じられることになる。次に引くのは、1901年2月14日の新刊紹介欄ののった記事である。

○新刊各種（1901年2月14日号3面）

北清事変写真帖

写真師山本誠陽氏、曩に岡沢侍従武官長に随ひて北清に赴き、得意の技量を揮ひて許多の実景を写せしが、猶ほ補ふに彼の籠城写真師山本讚七郎氏撮影を以てし、都合百七種を精巧なる写真版と為して一大美帖を発売せり。正に是画ける北清事変史、国亡びて山河在る清国宮殿の状況、惨憺たる籠城の光景、貔貅の共進会たる列国軍隊の有様、帝国の武勇を輝かせる占領の証、匪徒が亡状を極めたる狼藉の痕、義勇兵のさま、各国文武官の肖像、皆歴々として其真境に接するの想いあり。忽ちにして断腸、忽ちにして勇躍、以て百代の紀念とすべく、以て教育の好資料たるべし。伝家の珍襲、一世の奇観。定価十二円、神田錦町一丁目十六番地、山本誠陽発売

前引の井上裕子氏の『日清・日露戦争と写真報道 戦場を駆ける写真師たち』によれば、『北清事変写真帖』と銘打たれた写真集は事変後数種刊行されたというが、山本が絡んだそれに関する説明と朝日の紹介文の内容は一致している。

そもそも、朝日と山本の関係は、事変以前から取り結ばれていたものであつ

た。1890年春に手狭になった芝、日影町の写真館を新築した際に、山本は次のような広告を掲載したが、朝日側も早速それを記事化して応じているのである。

○「写真場新築写真改良の広告」(1890年4月29日号4面)

生儀当所に写真場開設以来、江湖諸君の御愛顧を蒙り、日増繁昌に赴き、随て従来の写真手狭に相成候に付、今般同所同番地(旧宅より南方へ凡半町)に欧米最良の建築法に倣ひ写真場を新築し、光線の注射を改良し、構造手広くして御多人数の合写に適し、諸器械は更に外国より購ひ、全紙判以下手札判に至る迄一層鮮明の写真を調進可仕候。尤定価は従前の通にて、専ら製造に注意し、用品を精選し、非常の大勉強を以て来る五月一日より開業仕候間、何卒陪旧の御愛顧を以て陸続御光来被下度。且又出写は遠近を論ぜず、御報次第直ちに罷出、枚数に応じ格別の割引を以て精々廉価に御引受可申候間、従来御愛顧の諸君は勿論、今回博覧会に付出京の御方にも、何卒御光来の上、勉強の程御試みあらんことを希望仕候。

東京市芝区日影町一丁目一番地  
写真師 山本讃七郎

○「山本写真館」(1891年5月5日号3面)

芝日影町にて有名なる写真師山本は、去る一日を以て新築落成したるに付、右の祝意を表する為め、特別切符夥多製して諸方へ散布せり。此切符の効用は、通常一組三枚を購へば外に一枚無代価にて調進するもの。切符通用は本年十二月限りの事なり。

これらの記事以外にも、朝日新聞には山本の名が載る以下のような記事を確認することができた。

○「議事堂の写真」(1891年12月4日号3面)

○「個人賠償金」(1902年11月28日号2面)

○「ダゲレオタイプ 輝く発明百年祭 写真功労者を表彰」(1891年5月5日号3面)

ソースを同じくする資料を一括して示したかったので、本セクションのテーマから反れた。その他、義和団事件と山本の関係に関する資料としては、以下のようなものも見つかった。

○『燕塵』第4年第6号(24号)明治44年6月30日(宣統三年六月五日)

巻頭グラビア2枚目に、山本の「北清事変北京籠城者写真」掲載。

遠甚子の「編輯たより」にいう。

本月は例の如く天津に於いて北清事変籠城記念会の企てあり……巻頭に挿入したる北京籠城者写真は、当時籠城者の一人なる写真師山本讃七郎氏が、公

使館区域内に避難の際、僅かに搬入し得たる種板を以て、救援軍入京後間もなく、日本公使館に隣せる肅親王の邸前に於て撮影したるもの、貴重なる考古の資料と存じ、同氏に請て製版したる者に有之候。

『燕塵』は北京在住の日本人有志によって 1908 年に発刊された雑誌である 4。

3. 以下朝日新聞については、聞蔵Ⅱデータベースを使用した。
4. 『燕塵』については、国会図書館所収のものを使用した。

### 3、西太后肖像写真と山本讃七郎

本セクション以降に提示する資料は、1 で述べた筆者の研究テーマを追求する過程で見出されものとその後に見出した新しい資料である。

北京の王府井で写真館、山本照像館を開業した山本讃七郎が西太后の肖像写真を撮影したことは、従来、日本人の間で語り伝えられてきた（また、日向氏の手を経て東京都写真美術館に寄贈された遺品の写真資料のなかに、2 種類の西太后の肖像写真があり、この度、同館事業企画課、専門調査員 金子隆一氏のお取り計らいで閲覧、撮影することができた——図 1、図 2。特に図 1 は、『時事新報』1904 年 7 月 7 日が「清国知名の某氏が特に允許を得て撮影したる最近の写真より写したるもの」とのキャプションを付して掲載した「清国西太后最近肖像」と同一版であることが確認できた。この『時事新報』の記事および以下に引く関連資料に関しては、注 2 の遊佐『蠟人形・銅像・肖像画——近代中国人の身体と政治』第 8 章も参考にされたい）が、中国側の資料でそれが確認されていた訳ではなかった。次に挙げる文章は、筆者が研究の過程で見出した同時代中国人の貴重な証言である。

○『栄慶日記』光緒三十年四月二十五日（1904 年 6 月 8 日）

四月二十五日、卯入値、見面謝節賞。公事畢、面賞日本山本讃七郎恭照御容、下墊叩謝。退値、恭捧回寓 5。

栄慶は、西安に蒙塵した西太后と光緒帝に代わって義和団事件の処理に当たった蒙古旗人で、その功績もあって、事件後大官へと出世した人物である。

この記載をもって、山本讃七郎による西太后の肖像写真の撮影は、疑いの余地のない事実となった。

さらに、その撮影が実施された日付も中国側の資料によって確定することができる。当時の中国において大きな影響力を持っていた新聞メディアのひとつであった『大公報』6 に次のような記事が載っていたのである。

○「太后照相伝聞」(『大公報』光緒三十年三月二十日 [1904年5月5日] 号)  
「時事要聞」欄

伝聞、某公使夫人觀見時、言及各国君主之肖像皆許民間供奉以表其愛戴之忱云云。皇太后頗以為然、於本月十八日命日本写真師某君赴頤和園為皇太后照相。是日外務部司員陶大均氏入内充当翻譯。從此民間皆得瞻仰御容矣。

本月十八日とはもちろん 1904年5月3日のことである。某公使夫人とは筆者の研究において詳述したように駐清アメリカ公使夫人コンガーである。また、通訳を担当した陶大均とは、日清戦争の処理を担当した李鴻章に同道し来日した清朝外交部門における日本語スペシャリストである。

西太后の肖像写真撮影は、その出来事自体がニュースとなるような事柄だったのであるが、それは、海外においても同様であった。日本においてもそれは間もなく外字紙を引く形で報じられた。

○「西太后の真影」(『東京二六新聞』1904年5月31日号)

或外字新聞の記する所に依るに、西太后は従来写真を撮ることは絶対的に之を拒まれたるが、過般或外国公使夫人の頻りに勧めしより遂に本邦人の写真師をして尊影を撮らしめたりと云ふ。外国公使夫人の勧めし言に、歐洲各国及米国の為政者の肖像は坊間に販売せられ、臣民は之を購ひ其家の壁上に之を懸け、之によりて人民の愛国報公の念を強むるの用に供すといふにあり。加之清国の前駐仏公使の息女は仏国仕立の非常のハイカラにて共に熱心に之を勧めたる結果、西太后も遂に我を折て写真師の前に立せられたる次第なりと。

記事中の「本邦人の写真師」が山本を指していることはいうまでもない。

こうして生み出された西太后の肖像写真は、栄慶のごとき清朝の大官に下賜された他、西洋世界の外交儀礼に則る形で、諸外国の元首にも贈呈されることになった。次の資料は、そのことを報じた日本の新聞の記事である。

○「西太后御真影分与」(『朝日新聞』1904年11月17日)

外務部は西太后の諭示を受け、昨日米、独、露、墺、白五ヶ国公使に西太后の御真影一枚づつを分送し、各国皇帝にも贈呈する筈該五ヶ国公使は十二日参内万寿節の賀表を捧呈せしものなり。

記事にいう万寿節とは、西太后 70歳の誕生日のことを指す。各国公使の慶賀に対し彼女は早速自身の肖像写真を各国元首と公使への返礼の品とした訳である。

その贈呈には、極めて仰々しい儀式が伴ったようである。それを司ったのは

当時、外務部会辦大臣の要職にあった那桐で、彼の日記のなかに次のようにある8。

○『那桐日記』光緒三十年十月六日（1904年11月12日）

初六日、早進内、皇太后、皇上昇殿極殿、奧、美、徳、俄、比公使呈遞賀万寿国書、賞桐飯喫、巳刻礼畢。皇太后贈五国国主、五国公使照相各一張、用黄亭、由内務府送至外務部、桐同聯侍郎送至五館。桐復進内復命、申正帰。

この記述からは、肖像写真が「黄亭」に載せられて、恭しく各国公使館へ送られていった状況が伺われるが、実はその様子も写真に残されている。筆者が利用した『那桐日記』のテキストの口絵グラビア（図3）がそれで、西太后の肖像写真は生くるが如き扱いを受けて「お連れ申された」のある。

その那桐の日記にも、山本讃七郎の写真館（正式な名称は山本照像館であったが、照相館で記録されていることもある。この「揺れ」は他者の記録においても同様に見られる）の名は何度も登場し、実際に写真を撮ってもらっている。仕事柄、那桐は西太后の肖像写真を撮ったのが山本であると知っていたことであろう。そのことも手伝ってのことであろうか、山本は那桐のお気に入り写真師ともなったのであった。確かに山本は清朝の「上流階級をお得意とし」（日向1997年）ていたのである。

○光緒三十二年一月十二日（1906年）

早進内、謝賞春紙恩、不具摺、常服在乾清宮磕頭兩起。未刻到山本照相。申刻進署、酉刻帰。

○ 同 一月十五日

卯刻到北上門、皇上詣大高殿、寿皇殿行礼站班、到乾清宮謝賞元宵恩、保和殿筵宴、桐東辺第一、因站班未入座。……未刻随母親偕内子、二女、宝兒、五女到山本照相、遊齊羅福、公義洋行、徳昌洋行、酉正帰。

○1920年9月18日

即陰曆八月初七日。到山本照像館同内子、宝兒夫婦、七女、八女、綿孫、聯孫、萃妞、菊妞、藻妞共十一人照闔家歡樂図、是日天氣晴和、申初時光恰好也。

1920年に那桐が撮った「闔家歡樂図」すなわち家族写真も、使用したテキストのグラビアページに載っていた（図4）。

那桐と山本の関係についてひとこと付言すれば、那桐の邸宅も王府井エリアにあり、両所の位置関係は極めて近かった。

5. 『栄慶日記』については、謝光堯整理点校注釈の西北大学出版社版（1986年 西安）

を使用した。

6. 『大公報』については、人民出版社の影印版（1982～83年 北京）を使用した。

7. 『東京二六新聞』については、不二出版の影印版（1994～96年 東京）を使用した。

8. 『那桐日記』については、北京市檔案館編の新華出版社版（2006年 北京）を使用した。

#### 4、日記資料に見える山本讚七郎

3で採り上げた諸例から判るように、中国人の日記は、彼の地での山本の活躍、写真文化への寄与を知るうえで大変有用な資料である。そのひとつとして、さらにかの魯迅の日記を挙げることもできる。魯迅もまた山本の写真館を訪れていたのである。この極めて興味深い事実については、セクションを変えて改めて採り上げることにしたい。

さて、山本の名が登場する日記は、何も中国人のそれに限られる訳ではない。日本人の日記もまた同様に貴重な情報を教えてくれる資料として利用可能なのである。次に引くのは、戦前の我が国を代表する東洋学者のひとりであった内藤虎次郎（湖南）の訪華日記9の一節である。

○「己亥鴻爪記略」（1899年〔明治32年〕9月5日～11月21日）

（九月）十七日……北京城ニ至リ筑紫洋行ニ着シ其ノ指図ニテ林氏ノ家ニ宿ス……。

（九月）廿六日……午後……公使館ニ至リ鄭氏ヲ訪フ公務繁多ヲ以テ辞ス乃チ石井書記官ヲ訪ヒ話スルコト少頃ニシテ去リ筑紫辦館ニ至リ風景写真ヲ注文ス……。

（九月）廿八日午前山本照相館ニ至リ風景風俗写真ヲ注文シ午後上野古城ニ氏ト琉璃廠ニ至リ碑摺及書ヲ購フ夜石井書記官ヲ訪フ。

日記の最後には、中国旅行に関わる詳細な出納表が添付されていて、写真の代金も判る。

【付載出納表】

廿八日

一四元八拾仙 山本写真一ダース代

日本人、中国人を問わず、当時の清末から民国期にかけて北京に住んでいた、あるいは訪れ、立ち寄った際に山本写真館の門をくぐった人物はかなりの数に

上っただろうから、日記にその名を見出せる可能性はまだまだあるはずである。それというのも、一般的にいて、当時（特に清末期の中国人にとって）写真を撮ったり、写真館を訪れることは特記するに値するいわばハレの行為だったと考えられるからである。

その意味で、日記は、山本讚七郎に関してのみならず近代中国の写真文化を考える場合の貴重な情報源でもあり得る。次に引いたのは、山本が西太后の肖像写真を撮影していたことを記録してしてくれた栄慶の日記に見える写真に関する記述である（時間的前後関係を示すために前引の記述も再録してある）。

○『栄慶日記』に見る近代中国写真文化資料

光緒二十二年十月十五日。槐庭兄早到、与季兄同談、承書聯並耐庵小額、与季白連轆到豊泰照相館。有頃、三叔、中魯到、有頃慕師到。師執經坐、与三叔、季白、中魯左右侍立、照京師請業図。

光緒三十年四月二十五日。卯入値、見面謝節賞。公事畢、面賞日本山本讚七郎恭照御容、下墊叩謝。退値、恭捧回寓。

光緒三十二年九月二日。入値、已帰略飯、易車行、至玉亭処送行。到学部鈴榜、並与各試官合照一相。……。

宣統二年一月二十五日。午後侍三叔率兩男遊万生園、由東門入、歩至卍字楼茗話。遇瑞際堂、由西辺至照相館照像、並倚楼看山。

宣統二年二月三日。同三叔約允修、吉甫、蓮士為万生園遊、自己至西頗為尽興。飯鴻記歷三卷大楼洋飯館卍字楼二卷、出東門照像於大楼畔。

宣統二年六月三日。卯至万生園、於曉風楊柳中、觀初日芙蓉、復小坐蒼松古石間、領略菡萏香味。辰内率准男至、照相於幽風堂西木橋欄畔、茗話海棠式屋内、旋帰。

宣統二年七月四日。卯起、侍嬪率内及冢婦、次男、孫男女至万生園船庁、觀荷良久、復乘灯舸、攝影人臨流照之、遂放舟荷花深处、停橈久坐、花為四壁、香氣宜人。

宣統三年四月一日。十鐘後石農、静先、潤夫、蓮士、季超、秋浦、伯愚、午橋、次珊先後到、花間談宴、暢聚至申。季超先散、与諸君廊下摄影。伯愚、午橋又久談始去。日光転西、侍叔嬪率家人再摄影於湖山石畔、宝臣函到。

民国二年四月五日。玉圃、秀瑜、叙五来、同三叔与之遊李氏園。三叔与三君泛舟、旋共話清風榭觀本園図景、及主人同許穎初、憚薇孫、延子澄、景佩柯

並楊恩諸君摄影小照。「凌晨好友過門呼、結隊尋幽興不孤。煙景滿園芳樹綠、風湍鼓棹浪花粗。參差台榭天然画、点綴林巒着色図。更喜瀛洲諸旧雨、共留玉照伴菰浦。」

この資料からは、清末期の中国人がどのような時に写真を撮ったのか、また利用したのかについての具体的情報が読み取れる。こうした作業を積み重ねれば、近代中国写真文化史の実像がより明らかになるはずである。

9. 『内藤湖南全集』第6巻（筑摩書房 1972年 東京）に所収。

## 5、魯迅日記に記された山本写真館

魯迅が山本写真館を訪れたのは、1923年7月3日のことである。そのことは、次のように彼の日記のなかに記されている。

○『魯迅日記』1923年7月3日

三日 曇。休仮。寄三弟信。与二弟至東安市場、又至東交民巷書店、又至山本照相館買雲岡石窟仏像写真十四枚、又正定木仏像写真三枚、共泉六元八角。下午伏園来、並持交錫馬一匹、是春台之所贈。

すなわち、魯迅は、長弟の周作人と北京の中心部へ買い物に出かけ、その折に山本写真館にも立ち寄って、仏像の写真を多数買い求めたというのである。

日記の内容は、ありふれたとある休日の行動を習慣に随って書き留めた、山本讚七郎に関心でもなければ別段採り上げるべき点もないようなものであるが、実は、この日の記録は、魯迅研究の領域においては、一定の意味をもって理解されるべきものであるらしい。

それは、この7月3日が、魯迅が周作人と親しく行動を共にする最後の日となったからである。

どちらかが不帰の人となったとか、ふたりが異地に引き裂かれたというのではない。絶交したのである。7月14日の日記には、わざわざ「是夜始改在自室喫飯、自具一肴、此可記也（今晚より自室で食事をするに、みずから料理一品を用意する。これは特別に記し留むべきものなり）」と記してもいる。魯迅は、北京において周作人夫妻と八道湾胡同の住居で同居し、助け合いながら仲睦まじく暮らしていたのであるが、この日を境に終世相容れぬ間柄となってしまったのであった。そしてついに翌月2日には、八道湾の家を出て磚塔胡同へと引っ越してしまうのである。

ふたりの決裂には、周作人の妻、羽太信子が関係しているらしいといわれてきたが、真相はいまだ明らかになっていない。

このように、魯迅の人生におけるひとつの分岐点に山本写真館が登場するのであるが、膨大な蓄積のある魯迅研究のなかで、山本写真館に特別の関心が寄せられることは最近までなかったようである。その実状は、魯迅全集の注釈での扱われ方に見て取ることができる。現在に至るまで数次に渡り編纂されてきた魯迅全集にはその都度詳細な注釈が施されてきたが、「山本照相館」に注が加えられたのは、最新の2005年版全集（人民文学出版社 北京）の出版を待ってのことであった。しかも、その注は、1981年版全集（人民文学出版社 北京）の日本語全訳注版（学習研究社 1985年 東京）の訳注、つまり、日本人が施した注をそのまま利用したものであった。以下、比較のため、それぞれを挙げてみよう（日本語全訳版については、日記本文の訳も引いて置いた）。

○『魯迅全集』17 日記Ⅰ（学習研究社 1985年 東京）

曇。休み。三弟に手紙。二弟と東安市場に行く。また東交民巷の書店に行く。さらに山本写真館で雲岡石窟仏像写真十四枚および正定木仏像写真三枚、計六元八角を買う。午後、伏園来る。錫製馬一匹を持参す。春台より贈られたもの。

〔訳注〕山本写真館 王府井大街霞公府にあった。一八九七年（明治三十年）開業。当時は中国人経営の写真館がなかったため、政府要人もここに来て撮影したという。写真撮影のほかに、カメラおよび機材を販売していた。店主山本讚七郎（丸山昏迷『北京』）。

○『魯迅全集』第15巻（人民文学出版社 2005年 北京）

〔全集注〕山本照相館 日本人山本讚七郎開設的照相館、在北京王府井大街霞公府。1987年（清光緒二十三年）開業。除撮影外、並経営照相器材等。

訳注の典拠として明示されている丸山昏迷の『北京』とは、中国で活躍したジャーナリスト丸山幸一郎によって、名所旧跡ではなく当時の北京の実際をリアルに紹介することを目的に1921年に出版された北京ガイドブックである11。ちなみに、丸山は魯迅を日本に始めて紹介した日本人のひとりでもあるという。

日本語全訳注版の訳者が、「山本照相館」の注にその丸山昏迷の『北京』を利用することになった理由はよく判らない（他にも利用できる資料が存在していることは日向氏の研究および小論からも明らかである）。ただ、丸山の著作には、注として引かれた箇所以外に、他にも興味深い記述が見出せる。それは、当時の北京で開業していた日本人写真館が網羅されているという点である。すなわち、上に引用した「山本写真館」の節の冒頭部に置かれている）に続けて、東華製版所と5件の写真館を記録しているのである。面白い資料であるので、山本写真館の説明文全文とともに以下に引いておくことにしよう。

○『北京』「北京の邦人 写真師と製版所」

写真館は北清事変前に開業した山本写真館の外に二三あり、製版所は東華製版所一ヶ所あるのみ。

【山本写真館】(電話東局六六号)は王府井大街霞公府にある。明治三十年の開業で、当時は支那人の写真館がなかったので支那の大官等は皆な同館に来て撮影したさうである。北清事変の際一時休業し三十四年再び開業して今日に至った、写真撮影の外、写真機及び材料を販売する。

店主 山本讚七郎

【東華製版所】(電話東局二七九四号)東単牌楼大街にある。大正五年西河沿に開業し、八年末現在の場所に移転したのであって、荒尾氏経営の下に本店は大阪にある。

店主 荒尾千代治

【相川写真館】(電話東局二二三〇号)は崇文門内小報房胡同

店主 相川清水

【東華写真材料部】(電話東局二七九四号)東単牌楼大街

店主 外村大次郎

【西湖堂】(彫刻)(電話東局七五六号)崇文門内裱褙胡同

店主 加治伊三郎

【岩田写真館】(電話南局二一八二号)前門松尾家旅館内

店主 岡本寅雄

【志方商店】(電話東局八一六号)崇文門内象鼻子前坑

店主 志方房太郎

話がここで終われば、魯迅と山本写真館の関係自体には、さしたる意味を見出すことはできないのであるが、日記に記された両者の関係(より正確に言えば、魯迅と彼が山本写真館で購入した写真との関係)には、意外な後日談があったのである。それを筆者は張永波氏の「清末民初的正定古跡老照片」(『文物春秋』2010年第2期)という報告12から教わった。

張氏によれば、1923年7月3日に山本写真館で魯迅が購入した「正定木仏像写真」3枚のうちの1枚——隆興寺摩尼殿背坐観音の写真が、現在は魯迅博物館の一角となり公開されている魯迅故居——魯迅が北京時代の最後を過ごした阜成門内西三条胡同の小さな四合院——の一室、彼の小さな書斎兼寢室に残されているというのである。筆者も昨年北京を訪れた際、実際に確認した(図5)。その写真は、壁に掛けられた小説『藤野先生』に描かれた魯迅の仙台時代の恩師、藤野巖九郎氏の肖像写真の真下の机の上に置かれていた。魯迅にとって藤野巖九郎氏の写真が持つ意味については、いまさら何の説明も要らないであろう。では、もう一枚の正定隆興寺観音像の写真の存在については、どのように理解すればよいのだろうか。あるいは決別前、弟、周作人と最後に行動を共にした記憶を留める品として、それは日々魯迅の視線を受け止めていたのかもしれない。もし、この想像が当たっているならば、魯迅兄弟が、山本写真館であれこれ語らいながら写真を選ぶ楽しげな情景までもが筆者の目の前に浮んでくる。

最後に無粋な話を書き足して本稿を終えることにしたい。

陳明遠氏の『文化人与銭』によれば、この年の魯迅の総収入は2304元<sup>13</sup>。八元六角の写真は、決して安価な買い物ではなかつただろうと思われる。

〔付記〕本研究は、公益財団法人両備櫻園記念財団の研究助成を得て実施した研究課題「岡山の写真師、山本讃七郎と近代中国の写真文化」の研究成果の一部である。

10. 『魯迅日記』については、人民文学出版社の1981年版を使用した。
11. 『北京』については、国会図書館の近代デジタルライブラリーで閲覧できる。
12. 『文物春秋』2010年第2期
13. 百花文艺出版社 2001年 天津。ちなみに、陳氏によると、当時の1元は現在の人民元に換算すると35～40元に相当するという。



図1 西太后の肖像写真（東京都写真美術館蔵、筆者撮影）



図2 西太后の肖像写真（東京都写真美術館蔵、筆者撮影）



図3 西太后の肖像写真を運ぶ「黄亭」行列



図4 那桐の家族写真（左辺キャプションに山本照像館の名が見える）



図5 魯迅故居の書斎兼寢室の机上に残されていた観音像の写真  
(筆者撮影)